

平成 21 年
9 月 30 日

病害虫発生予報 10月号

茨城県病害虫防除所
茨城県植物防疫協会

全ての農作物に残留農薬基準が設定されています！！

薬剤散布の際は周辺作物へ飛散しないよう十分注意しましょう

< 目 次 >

・ 今月の予報

【注意すべき病害虫】

果樹共通(カキ・リンゴ):カメムシ類	1
イチゴ:ハダニ類	1
施設野菜(ピーマン・イチゴ・キュウリ):うどんこ病	2
施設野菜(トマト・キュウリ・ピーマン):アザミウマ類	2

【その他の病害虫】	3
ダイズ・ナシ・ブドウ・抑制トマト・抑制キュウリ・抑制ピーマン・イチゴ・ 秋冬ハクサイ・冬レタス・秋冬ネギ・共通害虫	

・ 病害虫ミニ情報

ナシ黒星病の秋季防除を徹底しましょう	4
--------------------	---

・ 今月の気象予報

・ テレホンサービス

029(226)5321

本文に記載された農薬の登録内容は、平成21年9月28日現在のものです。

農薬登録速報については、農林水産省ホームページ「農薬コーナー」
<http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/index.html> 内の登録速報を参照してください。

詳しくは、病害虫防除所へお問い合わせ下さい。

茨城県病害虫防除所 Tel :029-227-2445

予報内容は、ホームページでも詳しくご覧いただけます。

ホームページアドレス <http://www.pref.ibaraki.jp/nourin/byobo/>

・ 今月の予報

【注意すべき病害虫】

果樹共通(カキ・リンゴ)

1. カメムシ類

【予報内容】

発生時期	発生量	発生地域
-	平年並～やや多い	県下全域

【予報の根拠】

9月下旬現在、カキにおける調査では、被害果を認めず平年並である。

予察灯（かすみがうら市）へのチャバネアオカメムシの誘殺数は、平年並～やや多い。

9月中旬現在、ヒノキ林におけるカメムシ類の発生量は、平年並である。

【防除上注意すべき事項】

果樹園内をよく観察し、カメムシ類が飛来した場合は、収穫前日数に注意して薬剤散布を行う。

薬剤散布は、カメムシ類の活動が鈍い早朝に行う。

イチゴ

1. ハダニ類

【予報内容】

発生時期	発生量	発生地域
	やや多い	県下全域

【予報の根拠】

9月下旬現在、被害葉率及び発生地点率は平年並～やや高い。

気象予報によると、向こう1か月の気温は平年より高いと予想され、発生を助長する条件である。

【防除上注意すべき事項】

ハダニ類は増殖が速いので、発生の少ないうちの防除を徹底する。特にビニール被覆後は発生が増加するので、ビニール被覆前後の防除を徹底する。

薬剤は、薬液が葉裏や葉柄にもかかるよう、十分な量で丁寧に散布する。また、薬剤抵抗性ハダニ類の出現を防ぐため、同一薬剤の連用は避ける。

施設野菜（ピーマン・イチゴ・キュウリ）

1. うどんこ病

[予報内容]

作物名	発生時期	発 生 量	発生地域
ピーマン		多い	県下全域
イチゴ		やや多い~多い	
キュウリ		やや多い	

[予報の根拠]

9月下旬現在，ピーマンの発病葉率は平年より高く，イチゴではやや高い～高い，またキュウリではやや高い。

気象予報によると，向こう1か月の降水量や日照時間は平年並と予想されている。

[防除上注意すべき事項]

発生が多くなると防除が困難になるため，初期防除を徹底する。イチゴでは，特にビニール被覆後は発生が増加するので，ビニール被覆前後の防除を徹底する。

り病部は新たな伝染源となるため，病斑の多い葉は取り除き，ハウス外に持ち出して処分する。

薬剤は，薬液が葉裏や葉柄にもよくかかるよう，十分な量で丁寧に散布する。また，薬剤耐性菌の出現を防ぐため，系統の異なる薬剤を散布する。

施設野菜（トマト・キュウリ・ピーマン）

1. アザミウマ類

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
	やや多い~多い	県下全域

[予報の根拠]

9月下旬現在，トマト，キュウリ及びピーマンの発生量は平年よりやや多い。

気象予報によると，向こう1か月の気温は平年より高いと予想され，発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

アザミウマ類は増殖が速いので，発生の少ないうちの防除を徹底する。

アザミウマ類はトマト，ピーマンの黄化えそ病（TSWV）を媒介し，特にミナミキイロアザミウマは，キュウリの黄化えそ病（MYSV）も媒介するので注意する。

薬剤は，薬液が葉裏や花にもかかるよう十分な量で丁寧に散布する。また，薬剤抵抗性アザミウマ類の出現を防ぐため，系統の異なる薬剤を散布する。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予想	発生概況及び注意すべき事項
ダイズ	紫斑病	発生量：平年並	適期収穫に努め，収穫後は速やかに乾燥・調製を行う。
ナシ	黒星病	-	秋季防除を徹底し，落葉は，翌年の伝染源となるので，集めて適正に処理する。 (p. 5 ミニ情報参照)
ブドウ	べと病・さび病・褐斑病・晩腐病	-	落葉・巻づるは，翌年の伝染源となるので，収穫終了後に集めて適正に処理する。
トマト 抑制	タバココナジラミ	発生量：平年並	9月下旬現在，平年並の発生である。
キュウリ 抑制	ハモグリバエ類	発生量：やや多い	9月下旬現在，やや多い発生である。
抑制ピーマン	斑点病	発生量：平年並 ～やや多い	9月下旬現在，平年並～やや多い発生である。
	タバココナジラミ	発生量：平年並	9月下旬現在，平年並の発生である。
イチゴ	じゃのめ病	発生量：やや多い	9月下旬現在，やや多い発生である。
	炭そ病	発生量：平年並 ～やや多い	9月下旬現在，平年並～やや多い発生である。
	コナジラミ類	発生量：やや多い	9月下旬現在，やや多い発生である。
秋冬ハクサイ	白斑病	発生量：平年並	9月下旬現在，平年並の発生である。
	軟腐病	発生量：平年並	9月下旬現在，平年並の発生である。 風雨が続きと発生が助長されるので，台風の後には防除を徹底する。
	べと病	発生量：平年並	9月下旬現在，平年並の発生である。

冬レタス	菌核病	発生量：平年並	9月下旬現在，平年並の発生である。
	腐敗病	発生量：平年並	9月下旬現在，平年並の発生である。結球開始期に降雨が続くと発生しやすいので，初期防除を徹底する。
秋冬ネギ	さび病	発生量：平年並	9月下旬現在，平年並の発生である。
	ネギアザミウマ	発生量：多い	9月下旬現在，平年より多い発生である。
共通害虫	ハスモンヨトウ	発生量：平年並	9月下旬現在，フェロモントラップへの誘殺数は，平年並である。
	オオタバコガ	発生量：平年並	9月下旬現在，フェロモントラップへの誘殺数は，平年並である。

ナシ黒星病の秋季防除を徹底しましょう

本年は、全県的にナシ黒星病（以下黒星病）の発生が極めて多くなりました。来年の発生を抑えるために、秋季防除を徹底しましょう。

1. 秋季防除について

黒星病の伝染源は、越冬芽と落葉の2通りあり、それぞれに対しての十分な対策が重要です。

薬剤散布

黒星病は、秋季に葉裏にうすい黒色の病斑（秋型病斑）を生じます。9～11月の降雨時に秋型病斑からりん片への感染が盛んになり（図1中のA）、翌年の伝染源となります。

対策

- ・ 収穫直後及び10月に、オキシラン水和剤等殺菌剤の散布を必ず行いましょう。
- ・ 薬剤散布量は、10a当たり300リットルを目安に十分な量を丁寧に散布し、かけむらのないよう努めましょう。
- ・ 徒長枝に薬液がかかるようにすることが極めて重要です。
- ・ 黒星病は降雨によって伝染するため、秋季に雨が長く続く場合や多発園では、落葉前の11月上旬にもさらに追加の防除を行ってください。

落葉処理

秋型病斑を生じた落葉上では、翌年の3月中旬頃から子のう胞子が形成され、5月下旬頃まで降雨によって飛散して伝染源となります（図1中のB）。

対策

- ・ 来年の伝染源を減らすために、落葉を集め、土中深く埋めましょう。
この作業は労力がかかりますが、高い防除効果が期待できます。
- ・ より簡易な方法としては、ロータリーをかけて、落葉をすき込むことも有効です。

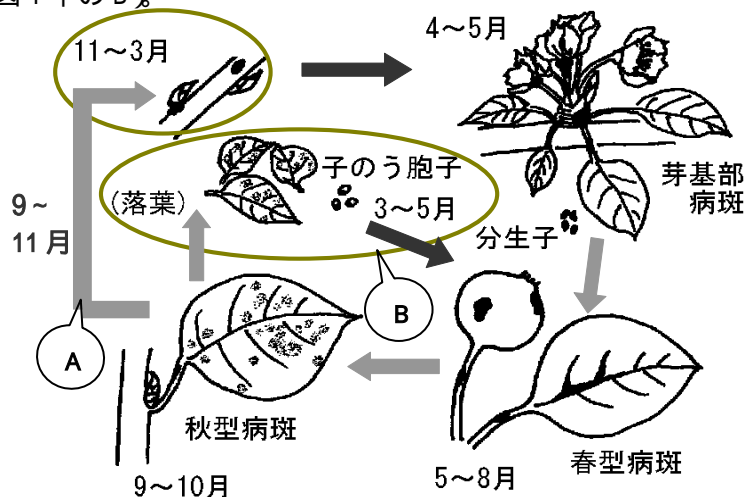
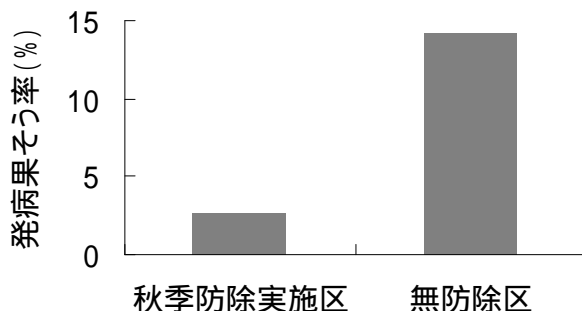


図1 ナシ黒星病の伝染経路

2. 秋季防除の効果について

薬剤散布

園芸研究所の試験結果によると、秋季2回の薬剤散布処理をすると、翌年の発病果そう率は、2.6%となり、無防除区の14.2%と比較して低くなりました（図2）。



（調査方法）

- ・ 秋季防除実施区では、2008年10月10日及び10月28日の2回、オキシラン水和剤600倍液を散布。
- ・ 無剪定で2009年4月28日までおき、全果そう葉の発病を調査して、発病果そう率を算出。

図2 ナシ黒星病に対する秋季防除の効果（園芸研究所試験結果より）

落葉処理

病害虫防除所の巡回調査ナシ園における本年の黒星病発病果率，前年の秋型病斑発病度及び適切な落葉処理の有無の関係について，表に事例を示しました。

昨年秋型病斑の発生が見られた園のうち，適切な落葉処理を行った園の半数では，本年の発病果率が低くなりました（表の事例 ～ が該当）。一方，落葉処理が十分でなかった場合は，全ての園で発病果率が高くなりました（表の事例 ～ が該当）。

これらのことから，次年度の黒星病の発病を抑えるためには，秋冬期の落葉の処理を適切に行って黒星病菌の密度を低くしておくことが重要であると推察されました。

表 巡回調査ナシ園におけるナシ黒星病発病果率と前年秋型病斑発病度及び落葉処理の関係（事例）

事例 No.	昨年の秋型病斑発病度 ¹⁾	落葉処理	本年の発病果率(%) ²⁾
	0.2	ロータリーで 全面すき込み	0.3
	0.8		0.3
	1.5		0.3
	0.2	園の周縁部のみ 持ち出し処分	6.0
	0.3	草刈り機で 裁断後放置	2.3
	4.5	園の中央部のみ ロータリーですき込み (周縁部は放置)	3.7

1) 2008年10月中旬に，各園300葉見取り調査。発病度 = $(2A + B) / (2 \times \text{調査葉数}) \times 100$

(A: 病斑が葉全体の1/2以上に分布している発病葉数 B: 病斑が葉全体の1/2未満に分布している発病葉数)

2) 各園300果見取り調査(調査期間2009年5~8月での最高値を示した)。

3. 薬剤耐性菌について

近年，九州地方において，薬剤耐性菌の増加によってDMI剤の防除効果が低下している例が報告されています。茨城県ではDMI剤の防除効果の低下はまだ確認されていませんが，今後とも十分な注意が必要です。特に近年，県内では黒星病が毎年多発しており，ナシ園での黒星病菌の密度が高まっていると考えられます。このような条件下で，生育期のDMI剤散布に頼りすぎた防除を続けると，薬剤耐性菌の増加を助長してしまいます。DMI剤の散布を最小限にとどめるためには，秋季防除を徹底して生育初期からの黒星病菌の密度を低く抑えることが必要です。つまり，秋季防除は，薬剤耐性菌の増加を抑えるためにも重要なのです。

園内の黒星病菌密度が高いと，薬剤散布時期の少しの遅れやわずかな散布むら黒星病の多発生につながってしまう恐れがあります。秋季防除を徹底することで，来年の生育初期からの菌の密度を下げ，その後の薬剤散布の効果を十分に発揮させましょう。

・ 今月の気象予報

関東甲信地方 1 か月予報

(予報期間 9 月 26 日から 10 月 25 日)

気象庁 (9 月 25 日 発表)

< 向こう 1 か月の気温 , 降水量 , 日照時間の各階級の確率 (%) >

[確率]

要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	関東甲信全域	20	30	50
降水量	関東甲信全域	30	40	30
日照時間	関東甲信全域	30	40	30

[概要]

天気は数日の周期で変わるでしょう。

< 1 週目の予報 > 9 月 26 日 (土曜日) から 10 月 2 日 (金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率 60%

< 2 週目の予報 > 10 月 3 日 (土曜日) から 10 月 9 日 (金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率 50%

< 3 週目から 4 週目の予報 > 10 月 10 日 (土曜日) から 10 月 23 日 (金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率 40%

・ テレホンサービス

下記の情報を 24 時間提供しています。リアルタイムな情報を提供するために , 病害虫の発生状況等によっては内容を変更することがあります。

電話番号 : 029 (226) 5321

10 月上旬 露地野菜の病害虫防除について

10 月下旬 施設野菜の病害虫防除について

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬のラベルを必ず確認し , 適用作物 , 使用方法 , 注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には , 周辺作物に飛散 (ドリフト) しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 使用後は散布器具やホース内等に薬液を残さず , 良く洗浄しましょう。